

研究課題	情報端末機器を活用した一般体育授業の学びの効果に関する研究～体操競技国内トップレベルの使用方を授業レベルで活用した場合～		
氏名	仲宗根 森敦	所属	健康スポーツ科学講座
		職名	講師
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 ☒ ←受講済の場合はチェックをすること			
【研究成果の概要】（文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度） 【背景および目的】 これまでICT機器を用いた授業の効果に関する検討が多くなされている。しかしながら、配置場所の設定（どこから写すのか）、使用のタイミング（いつ行えばいいのか）、あるいは自身の動きをどのように観察する（どのように見る）のかといった課題が多く示されてきた。申請者は、これまで体操協会の研究部として活動を行い、そこではすでにトップレベルの選手がICT機器を有効に活用し成果を得ているのを現場で確認している。 そこで本研究では、体操競技のトップ選手が一般的に使用しているICT機器の利用方法が、一般体育実技の学びにどのような効果をもたらすのかを明らかにすることとした。 【方法】 対象となる授業は、本学の1年生が履修する申請者担当のスポーツフィットネス実習（トランポリン）で行われた。ipad及びビデオカメラといったICT機器で撮影した動画を遅延再生し、学習者にすぐに自身の動きの映像をフィードバックできるように学習を進めてもらった。ICT機器を設置した位置は図1の通りである。また、コロナ禍の影響により履修者を少なくするべく2グループに分けて行われた。実際の授業計画に関しては表1の通りである。全授業後にICT機器使用に関するアンケートを取り本研究の成果を確認した。 【結果および考察】 18人の被験者（男子8名、女子10名）からアンケートを回収し分析すると以下の結果が明らかとなった。 ・本授業においては83%の被験者からICT機器を活用できたと回答が得られた。 ・映像を見ることにに関して否定的な意見は見られなかった。 ・映像は初回から使用すべきが55%、少し経ってから使用すべきが39%、後半だけが5%と違いが見られた。 ・映像の角度は横から使用した方が良いとの回答が73%、縦から使用した方が良いとの回答が11%、どちらも一緒が16%であった。 ・映像によって自身の技能の向上に繋がったと感じた被験者は83%であった。 また、自由記述欄にて「映像を通して、自分の飛ぶフォームから改善点を考えたり、振り返りをすることができた」など多くの肯定的な意見がある一方で、「恥ずかしかった」「正直見てられなかった」などの否定的な意見も見られた。 全体的にICT機器を利用することについて好感を持っている一方で、自身の運動経験や技能レベルに応じて、使用する時期や角度に違いが見られた。特に、技能レベルが低い場合には、見ても動きを修正できないためICT機器を使用しない選択肢も挙げられよう。また公開範囲などを限定する（他の人に見られないようにする）配慮等が必要になる可能性が示唆された。 【結論】 トランポリン授業においてICT機器を使用する場合には①横から撮影する、②技能ごとに班分けをしてICT機器を使用する、③使用する時期は技能レベルがある程度上がってから使用する方がよいことが示唆された。			
【研究成果発表方法】 現在の段階では未定である。			

横方向からの撮影 縦方向からの撮影

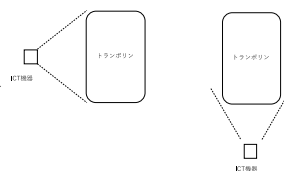


図1 ICT機器の撮影方向

表1 授業計画		
	Aグループ	Bグループ
第1回	通関授業	通関授業
第2回	通関授業①	対面授業①(ICT機器不使用)
第3回	対面授業①(ICT機器使用)	通関授業②
第4回	通関授業②	対面授業②(ICT機器使用)
第5回	対面授業②(ICT機器不使用)	通関授業③
第6回	通関授業③	対面授業③(ICT機器使用)
第7回	対面授業③(ICT機器使用)	通関授業④
第8回	通関授業④	対面授業④(ICT機器使用)
第9回	対面授業④(ICT機器使用)	通関授業⑤
第10回	通関授業⑤	対面授業⑤(ICT機器使用)
第11回	対面授業⑤(ICT機器使用)	通関授業⑥
第12回	通関授業⑥	対面授業⑥(ICT機器使用)
第13回	対面授業⑥(ICT機器使用)	通関授業⑦
第14回	通関授業⑦	対面授業⑦(ICT機器使用)
第15回	対面授業⑦(ICT機器使用)	通関授業⑧

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。